

傳藤原佐理心肋切 四

301  
10



始



古今味影集馬弟四



秋五日後

藤原敏弘

秋来と秋去とをて平に記す

毛凡の音の公勢馬がたの

ありてはさるるにたあまの

河道を了るるにたあまの

く後

如世

河川の涼しさをうらやまふた

とてはたはた





哥坊が 伴事ありしに

すかき 流

弘友別

あふゆはふさきしはらぬん  
わよははらぬん

かきしはらぬん

荻原奥風

現をむしりしはらぬん

ま一度ありしはらぬん

七 續

凡は内務

あふゆはふさきしはらぬん

わよははらぬん

あふゆはふさきしはらぬん

の 孫 長 久 延 和 中 世 盛

七 續

あふゆはふさきしはらぬん

古友の晴上稿

源定平

しきはなりわくくすんてらわ  
ぬきまきてやんちあわ

いんちあわ

いんちあわ

いんちあわはあしんちあわ  
いんちあわのいんちあわ

題不

後今

行本回浅来月方景見礼名心託

景の候もまじけ

大方れ結来か良き身もりか

敷物と礼以候や

わらだやうらむしあわ  
いんちあわはあしんちあわ  
いんちあわのいんちあわ



気候も如く車や舟は年をうつにあり  
た交り見らぬ書はもてあやま

惟貞御子の家のあな

徳一

一 時をわたりて  
しれはし事事のよむたあけ

書かす書より人へ  
妙をいみだうこそく徳

徳一

かきあつたあしと  
妙しあつた人こそ

題不

徳一

新ら書き翼打つけ  
うすゆつ秋をむる

おひつたに  
ゆつたに月わさ

惟高親王の家を尋ねて

大江山

いささかおぼろしの月夜に  
照らすはるかに

月を待つ  
なほえ方

秋の夜は月が光る一明を  
山にこゝろあつて

人の神は話のついでに  
はかばか

藤原宗平

さあ、いさだかに  
おぼろしく思ふ

惟高親王の家を尋ねて

藤原宗平

殊に春乃あつて

わらうものや けいあるさし

意不知

後人不知

ありてもしし けいあるさし ぬれをまよひ  
わらわえとや よるはたりし

ありのよれ ありてもしし けいあるさし  
とてせらるゝに けいあるさし のわかれを

文は けいあるさし けいあるさし けいあるさし  
せはは けいあるさし のけいあるさし

けいあるさし けいあるさし けいあるさし  
とてせらるゝに けいあるさし

ありのよれ ありてもしし けいあるさし  
わらうとや けいあるさし けいあるさし

もたらはのちよれ けいあるさし けいあるさし  
とてせらるゝに けいあるさし

ありのよれ ありてもしし けいあるさし  
とてせらるゝに けいあるさし



あつきのちりりしきものゆきをれきん  
よかぢい同人しなり

行人はあつね物さけりよのけ  
せりりしきのゆきをれきん

なれきたのみをれきんのきりあは

せい

友別

あつ風はあつ金のりきりゆき  
り作。玉はきりをれきん

題不知

友人不知

我門はあつ負鳥のちり帯とて羽は

風のよきかきり

あつあつしきりぬきりあつ白露の色

取る本としきりあつ無因

若くは...かほみ...  
伊ま...た...  
有を...  
乃...  
此...  
宛平...  
藤原...  
此...  
宛平...  
藤原...

此...  
宛平...  
藤原...

藤原...

天...  
乃...  
凡...  
凡...  
凡...

乃...  
乃...  
乃...  
乃...  
乃...

たまはるはなほ...にわが糸  
さうめなほ...

豈不知

後へへに

おろしとらふ...あな...  
...はなほ...  
...はなほ...  
...はなほ...  
...はなほ...

...はなほ...  
...はなほ...  
...はなほ...  
...はなほ...

あははなほ...  
...はなほ...  
...はなほ...

懐か親の家の言合

藤原朝臣

...はなほ...  
...はなほ...  
...はなほ...

...はなほ...  
...はなほ...  
...はなほ...

竹垣

今一書上の書ありてさうさう花介  
 をしものさしたは中をたきまふ  
 是れを不  
 今一書上の書ありてさうさう花介  
 をしものさしたは中をたきまふ  
 是れを不  
 今一書上の書ありてさうさう花介  
 をしものさしたは中をたきまふ  
 是れを不

文室朝康

ありのまじらふをたよぢれり  
理ねしころものさき

信濃通照

名にゆきしをわ  
しよれおちるも人うたはる

通照の作は寧業にみく

山より如所花をみ

布瑠今道

はがみしきくし新道と

西しきまむも

惟貞のころの家を今

藤原経行

林のまじらふをたよぢれり  
むらまじらふは

題不知

小野美林

少少のしりしりおちたのしりしりおちたのしりしり  
たしりしりおちたのしりしりおちたのしりしり

朱堂院のやぶに花を咲かす秋

けし

たかま

おみしりしりおちたのしりしりおちたのしりしり  
しりしりおちたのしりしりおちたのしりしり

藤原定方御下

あまのしりしりおちたのしりしりおちたのしりしり  
おちたのしりしりおちたのしりしり

きり

あまのしりしりおちたのしりしりおちたのしりしり  
おちたのしりしりおちたのしりしり

秋夜

あまのしりしりおちたのしりしりおちたのしりしり  
おちたのしりしりおちたのしりしり

宋みしりー びりー びりー びりー びりー びりー  
此はふしりー 壽之年 志之礼

志之礼

此方のみしりー びりー びりー びりー びりー びりー  
びりー びりー びりー びりー びりー びりー

志之礼

北よりのびりー びりー びりー びりー びりー びりー  
びりー びりー びりー びりー びりー びりー

物一びりー びりー びりー びりー びりー びりー

志之礼

在るびりー びりー びりー びりー びりー びりー  
びりー びりー びりー びりー びりー びりー

寛平御四ニ歳人 志之礼 志之礼 志之礼  
志之礼 志之礼 志之礼 志之礼 志之礼 志之礼

志之礼

花を折る事なすべくも  
流のついでなまし

情更れるそののふり

藤原解り柳

親しくなすまてわ  
まらしくなすまてわ

母の心なす人の  
ちもつまをさし

うかりしもの

母し

やもろく人のた  
藤原わたり

難は香にたひ

於たり藤原

主初め香に  
藤原甚母

平定文



秋合名強く谷とみし花房穂と出  
す枝もとくしつとく

寛平御時原官の冬今令

存は栴菜

空更の乃とせの年よりをいすしをこ  
いと拓ちくまみゆし

事付

物事のやまはれとせいふひとりのつ

々言が大和と換る事

題不ら

讀今令

くよわなるちとらとせと身春のみ

空よりいしこの花をみあつらふ

まいくとの花のいとく花のよみん

しきりれせしちの心

月年よこしきしつし朝露よれ

ての空はうらみぬし

仁和の帝うきよき  
時あきのうきよき  
東一きうみそく  
家一あきよき  
野一あきよき  
一いよき

鳥居

神はあきよき  
たはあきよき

古今後身集の巻五

梅下

惟公親之家号合子

久之原秀

不のうにのうさうさの志がふ  
まむやうをさあやと云う

ふし本は名は後し海道のた

ふのなをけたはゆかた

秋よりより信る

紀伊守

えははれをわがうはの心をまをらうをれき

ふたはれをうわりの藍

懐かしく

是のた

ふたはれをうわりの藍

のけしは美奈しぬ光

我門のわき田のいしし列たしすま  
うさうふお非なるのしよ

貞親御時後給殿の河前と梅  
樹ありけら西のうさうさう公  
お枝の紅葉おしあたまけらを  
うへく休あきさう後法とよめ

藤原勝信

おちしえをわたり末几美のを付

西より之れ始なるんれ

石のうさうけしおとらふ乃  
もみちをさうけき

秋凡のうさうけしおとらふ乃  
岸のうさうけしおとらふ乃  
惟とらふみふのうさう

あはれ

新らゆめの色はひらききりり

あはれもれをききりり

あはれ

あはれのおもひをききりり

あはれのおもひをききりり

あはれ

あはれ

あはれのおもひをききりり

あはれ

あはれのおもひをききりり

あはれ

あはれのおもひをききりり

あはれ

神の社のたよりを羅けつたに  
きれしもちちよみ

木下

子婚破かこれきりよる者ふくは  
とよに者ほりいさけけ

惟良の親との家のうらみ

王

あはるしき事とわかれしあは  
ゆり人のいけがをみ

寛平山向の宿字のよる

読人不知

らねと我金てり惜きもあち  
とよりり乃いそとみれ

やまの園へ移るる

霧のしき

別

たつやあの子きなれ  
こをぬいさし

惟貞親王のふのころあはせし

よきあはせし

秋の霧は今朝もたつとや佐保の  
は母も甚しきとよきにては

秋の霧とよきと

坂上是則

佐保山のけしきもみづらうけんと  
さすのあつともなりあつちあつち

人の家れ前裁菊の結付くうらな

在原業平

うらなはなす時や  
良き花もなほ根をへうれ木

惟貞親王のふのころあはせし  
未友判

露たつ良折の頭撫菊の花をわく杜  
れとあつちあつち

寛平沙阿の茶花を法然の

藤原敏行

花のこころも春の如く  
深き心とて春の如く  
深き心とて春の如く

花のこころも春の如く  
深き心とて春の如く  
深き心とて春の如く

おきし山阿彌の茶花の

千里

殖時花の遠く在り  
茶花は布衣

小春の心

秋の御時とてあはせし洲渡り

吹上り名もなきはくちの菊

をうらみしはくちの菊

茶原朝臣

ふし子の不しはくちの菊



えいはいあはれね。たふらぬすまふ。

仙宮の菊をわたり人の心をた

あらふまをさしあけしやまふ

書はけし

ぬれさしあはれぬあゆのよ...  
あ子も我もぬれぬ

あはれぬあはれぬあはれぬ  
あはれぬあはれぬ

本友別

をい深人待付名白妙乃神の...  
あはれぬあはれぬ

大澤の池のたよもあはれぬ  
あはれぬあはれぬ

あはれぬあはれぬあはれぬ  
あはれぬあはれぬ

あはれぬあはれぬあはれぬ  
あはれぬあはれぬ

了あふ

えとのまじりたるをばしりては  
せいのまじりたるをばしりては

新さまの世をみく

新垣

あらまじりたるをばしりては  
まじりたるをばしりては

信長親王のちりてはし  
新垣

しろくけりたるのまじりたるは一年に二般  
まじりたるをばしりては

信長親王のちりてはし  
新垣

新垣  
まじりたるをばしりては

新垣  
まじりたるをばしりては

あやしき世に—すのぶれをさすれ  
しるきう—いん—きん—きん—きん

題不毛

續人—らは

妙出山れも—れも—れも—れも—  
あうせつ—あうせつ—あうせつ—  
うや—うや—うや—うや—  
い—い—い—い—い—い—

藤原剛雄

わ—の—の—の—の—の—  
日の元—わ—わ—わ—わ—

題不毛

な—ら—ら—ら—

たけ—たけ—たけ—たけ—  
わ—わ—わ—わ—わ—わ—

題不毛

續人—ら

う—う—う—う—う—う—

秋まゝの初霜の光を

けしきこそお人のいそぐたのちのち

あはれ同雄

ふひくはうそあふのけせ

成るるはしるしおおりの風

ちりやうはらひちりあつら

ゆるぎたあねわれそ

是れをい 讀みよ

秋は来ぬ美葉たにあり

美わきしふひはなり

あゝわきしはらにやとほむ

ありやうしやみらう

あゝのほくしんあやに

しるあはれをみよ

あゝをれちりやのちをみ

あゝのちをれちりやのち



題しる

まことのこころはゆのわくこころまろく  
やまゆきまれ松林はかあらし

中林院のまれこころまたたけ

遍照

わん人のわたりたたらるるのしは  
あまこころしりしあまこころ

二条后の東宮れみれもむ所と申

時海ゆのらるるあまゆき

これなる飛こころあま

素性法師

おまげのたまれてとらるるみれにえ  
くれなるあまこころまたたけ

惟らねのまのま

兼平

らけやち非まこころは  
れらあまこころまたたけ

同人の家ねをうらむ

敏行 敏世

我々此らうらむれども  
未、のともらのらむとてうらむ

忠孝

甘南條のうらむれども  
裁着 花 年 す 社

此山うらむをうらむしうらむ

孝一

うらむしうらむしうらむ  
三らはあふのうらむしうらむ

秋をうらむうらむ

善徳

たうらむしうらむしうらむ  
名うらむしうらむのうらむしうらむ

小僧うらむしうらむしうらむ

とふらなまきり 世々

あふれしつらもねえとたあられを  
しゆわれせんとなれぬす

ふみれとれしをすしりたる  
はをわすらるるしりものたれ  
なれま

清原深草義

かまがらみの山ますより杖がれそ  
けだふこりぬせいさむしり

寛平山内中文字三つ合

藤原良風

志らな見えよこすのたれはさうつふ  
あり乃なりせつ不しりつにけり

龍田河のもよみ

坂とたつ



ともしらばのたうれあよきにはいりたる  
うられりしはなれりし事

志願ぬふるに

春道列樹

あまのつばなはつらきうけゆるしともしは  
たふらぬもみもみらるまじし  
池きこしは葉ぬららる事

卯辰

うきあははぬお川流せよのまはもれき  
みもねえらあえそにみえ川

市子流御舟のうまはあさん  
とすのひもももみらるまじし  
すもあそたそれを積をたふ

卯辰

ともしらばのたうれあよきにはいりたる  
うられりしはなれりし事  
らあはあれそな水にこせり

たれあされ秘のふねを

忠告

とくもる社のふねはおとむはら  
おぢやまのふねとちよふ

ふねーふね  
ふねーふね

ふねーふねふねふねふね  
ふねーふねふねふねふね

見

後

ふねふねふねふねふねふね

ふねふねふねふねふねふね

ふねふねふねふねふねふね

ふねふねふねふね

ふねふね

ふねふねふねふねふねふね  
ふねふねふねふねふねふね

宛平街の古き大なりまぐれと作  
事あるさうにふぶたうはし  
くらはたうとふわぶと  
後く其の情をさう

息風

みよのわたりくる水のいろみり秋  
者いよと打ひしむねる  
亭のぼつ心をたうをたし

花午のうし 暮らう

毎事こいしらはたうたうはし  
州化秋の車りかちう後

九月一に大井

暮らう

ゆふとさうのこしなみ  
さうさうのさう

同いよの  
むら

301  
10

傳藤原佐理書

筋切

釋文 四

みそ一羽はたきしりむとみ  
あまのむすこたむなりあはれうさか

301

10

傳藤原佐理書

# 筋切

釋文

四

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十

301-10

古今和歌集 卷第四

秋上

秋來と免師者さや可仕見えねと  
 毛風の音爾會驚かれぬる  
 あ支能多つ日へ能男共の可も  
 河爾道遙爾罷希るにとも爾  
 氏讀る

藤原敏行

紀貫之

河風の涼も在香うちよす累なみ  
と、茂爾や秋の多つらん



題不知 讀人しら須

わ可脊子可ころ裳能春そを不

支可へしうらめつらしき秋の初風

昨日こそ早苗取し可以都能麻兒

以な者裳楚よ支秋風そ吹

惡支可せの不支爾し日よ利飛さ可多

能あ万のうはな三たゝぬひ八なし

ひさ方能の天原の王たし守君わ多利

なは可ち可くしてよ 不な可くし世よとも

銀河もみちを橋爾わ多世八や織女

つめの秋をしも待

こひくゝてあふ夜者今夜者天河霧

多ちわ多利阿希須もあらなん

寛平御時爾七日能ゆふへ爾作男共  
歌獻と仰事あ利个るに人二  
可は利て讀る

紀 友 則

あま能可は惡さ世し良な見多と利つゝ

わ多利は年者阿希そし爾个累

於なし御時の后宮歌合爾

藤 原 興 風

契个むこゝろそつら支多なは多能歲

爾一度あふ者阿布可者

七日讀る 凡河内躬恒

毎年爾阿ふとは數禮と織女農宿夜

能可すそ須く那可利个る

織女爾かし鶴糸能うちは恵て年  
の緒長く戀やわ多藍

題しら須

素性法師

今夜  
今日こむ人爾はあはしたなは多のひさし支  
はと爾あえもこそすれ

七夜の曉爾讀る

以まはとてわ可る、時者天河わ多ら  
ぬさ支爾楚てそひちぬる

八日よめる

壬生忠岑

个ふよ利はいまこん年の昨日をそ  
いつし可との三まちわ多るへ支

題不知

讀人しら須

從木間洩來月乃景見禮者心筑

紫の秋者支爾け利

大方能秋來る加良爾吾身こそかな

敷物と於もひ成ぬれ

わ可ため爾久る秋爾しもあら那く爾むし

能年支个はまつそ可那し支

毛のことにあ支そ可那し支もみち八うつろひゆくを

可支利とおもへは

飛登利ぬる東こは草葉にあらね

と茂あ起久類夜ひ者露个加利个利

惟貞御子の家の歌合爾

讀人しら須

以都ことは時者わ可ねと悪支農夜そ  
も能お无布事の可支利な利ける



雷鳴壺爾て人々あつま利氏  
秋を、しみ介るついで爾讀る

躬 恒

か久者可利をしと於もふよを意多つらに  
ねてあ可すらん人さへそう起

題不知 讀人しら須

新ら雲爾翼打可はし飛雁の可春さ

へみゆる秋農の夜の月

散餘な可に夜農不けぬらし可利可ねのき

こゆる楚ら爾月わ多る三由

惟喬親王の家歌合爾

大江千里

ひさ可多能つ支の可つらもあ支はなを毛

みち須れ者や照まさるらん

月を讀る 在原元方

秋の夜能の月能の光し明介れ者くら布

農山もこ盈ぬへらな利

人の許爾罷禮り介る時き利く須

能な支介るを聞く 藤原忠房

支利く須意たく那く支そ惡支のよ

能な可支思者吾そ万される

惟貞親王家能の歌合爾 藤原宗子

秋之夜乃あくるも不知なくむしはわ可こと

わ可ことものや可那し閑るらん

題不知 讀人不知

あ起者支もいろつ支ぬれ者支利く須

わかねぬことやよるは可なし支  
あ支のよ能つゆこそことにさむ可らし  
久さむらことに尤しのわふれ者  
き見し能布久さ爾や徒るゝ不る  
さ登はまつ尤しのねそかなし可利ける  
悪支のゝ爾みちも万とひぬ万つむしのこ  
惠須る可多爾やとや可ら万し  
あ支のゝ爾人まつむしのご衛春那利  
われ可と行ていさと不ら者無  
毛三ちはのち利てつもれるわかやとの多れ  
をまつむしこゝらなくらん  
悲くらしのな支つるなへ爾日はくれぬ  
とみれ者山の可个爾そあ利个る

悲くらしのなく山さとのゆふくれ者風  
よ利本可爾問人もなし  
待人爾あらぬ物可らはつ可利のけ  
さなくご衛の免つらしき可な  
これさたのみご能家の歌あは  
せ爾 友 則  
あ支風爾者つ可利金のそきこゆな  
る誰可玉徒さを可个てきつらん  
題不知 読 人 不 知  
我門爾いな負鳥のなく苗爾今朝吹  
風の爾可利八き爾个り  
糸者やもな支ぬる可利可白露の色  
取る木々も紅葉敢無國

者<sup>ニ</sup>可<sup>ク</sup>須<sup>ク</sup>三<sup>カ</sup>須<sup>ク</sup>み<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>爾<sup>シ</sup>可<sup>ク</sup>利<sup>ク</sup>可<sup>ク</sup>ね<sup>者</sup>  
伊<sup>マ</sup>そ<sup>ナ</sup>く<sup>那</sup>る<sup>秋</sup>き<sup>利</sup>の<sup>う</sup>へ<sup>爾</sup>  
夜<sup>ヲ</sup>寒<sup>ミ</sup>三<sup>ころ</sup>も<sup>可</sup>利<sup>兼</sup>鳴<sup>苗</sup>爾<sup>萩</sup>  
能<sup>下</sup>葉<sup>も</sup>色<sup>付</sup>二<sup>个</sup>利

此歌或人のい者久柿本人丸可な利

寛平の御時后宮能歌合爾 藤原菅根

あ支可せにこゑをほ爾あ个て久るふ年八

天能とわ多る雁爾そ在个る

か利のな支けるを讀める

凡河内躬恒

有起こと越おもひ徒ら年てか利可年能

な支こそわ多れ秋のよな／＼

惟貞親王能家の歌合爾

壬生忠岑

やまさとは惡支こそことにわひし个れ  
志可のな久年爾めをさ万しつゝ

題不知 讀人しら須

於く山爾もみち不みわ个なくし可の

こ衛支く時そあ支は可なしき

惡支はき爾つ万こ悲をれ者阿しひ支

農山したとよ三志可のなくらん

あ支はきを志可ら三不せてなくし可の

め爾は見え須ておとのさや个さ

惟貞親王の家歌合爾

藤原敏行

惡支八支の花さ支爾个利高砂のをのへ

農し可は以まやなくらん

む可しあ飛し利て侍利个る人の秋の

爾あひて毛の可多利し侍利けるついで爾

躬 恒

悪支者支の布るえ爾さ个る花みれ

者もとのこゝろはわ春れさ利个利

題不知 讀人しら須

悪支は喜の下葉以ろつく今よ利や

悲と利阿る人のい年可て爾する

な支わ多る可利のな三多や於ちつらん

毛のおもふやとの八支のうへの露

者支の露多ま能ぬ可むとれ者个ぬ

よし三む人者えたな可らみよ

を利てみはおちそ志ぬへ支秋者支の

え多もたわ、爾於个る志ら露

は支の者那ちるらん小野の露霜爾

ぬれてを行む夜八不个ぬとも

惟貞みこの家の歌合爾

文室朝康

あ支の、爾於くしらつゆ者たまなれや都

羅ぬ支可くる久もの意とすち

僧正遍照

名爾免て、をれるは可利所を見な

へし王れおち二支と人二可たる名

遍照可許爾事樂に罷と氏男

山爾氏女郎花をみて

布瑠今道

越なめし有しとみつゝそ行過る男山  
西多て利と於もへ者

惟貞のみこの家の歌合爾

藤原敏行

秋のゝ爾やと利八數へしをみ那へし名を  
むつ末し三たひなら那國

題不和

小野美林

乎み那へし於本るのへ爾やと利世八あや  
な具阿堂能名をや多つ續(?)ん

朱雀院の女郎花合爾讀氏獻

ける 左大臣時平

越み那へし惡支の野風爾うちなひ支

こゝろひとつを多れ爾よ須らん

藤原定方朝臣

あ支名ら氏惡布こと可堂起乎見なへ  
四天の河原爾於ひぬ物遊る

貫之

多可秋爾惡らぬ毛乃由る女郎花な所  
以婁爾意天々末堂起宇門呂布

躬恒

妻戀る鹿そ鳴なる女郎花おの可須  
む野の花としら須や

乎み那へし吹須支て久る惡支可世は  
免爾はみえ年と香こそ志る个れ

壬生忠岑

悲度のみる事や久るし支を三なへ  
しき利の万可支爾たち可くれつゝ

素性

悲と利の三可むるよ利八をみ那へし我  
春むやとにうゑて三まし越

物へ罷个る爾人の家爾女郎花う  
る多利遺類を見天

兼覽王

を美なへしう志らめた久裳美遊る可な  
荒多るやとに獨多て禮者

寛平御時二藏人所男共嵯峨野爾  
花み爾罷氏歸とて歌讀ついで二

平定文

花爾あ可てな二可へる覽女郎花於本可  
流のへ爾年な末し毛のを

惟貞能みこの家歌合爾

藤原敏行朝臣

難爾人爾來てぬ支可个し不ち者可  
末久る悪支ことに野へを二本者須

貫之可家爾人のやと利た利个る可ふ  
ち者可まをさした利个るをみて  
可へ利てのち爾讀て遣个る

貫之

やと利世し人の可たみ可藤袴和春られ  
難支香二奉ひ管  
於なし藤袴を

主知ぬ香こそ二奉へ禮惡きの、爾  
誰脱懸し藤袴其母  
素性

平貞文

從今者殖氏谷爾みし花薄穂爾出  
る秋者久るし可利个利

寛平御時后宮の歌合爾

在原棟梁

惡支の、乃くさの手下可者那す、支本二  
いて、招曾てとみゆらん  
素性

わ連の三やあはれとおも八むひ久らしの鳴  
夕暮能大和と撫志子

題不知 讀人しら須

みと利なる悲とつ久さとそ春八みし

惡支八色々の花爾そあ利个る

毛、久さの花のひもと久秋の、爾おもひ  
多者れむ人など可免所

月草爾こゝろも者須らん朝露爾ぬれ  
ての色(のち?)はうつろひぬとも

仁和の帝みこ爾於者し万し遣る

時ふるの多支こらんし爾お八し

末し希るみち爾遍照可八の

家爾やご可世給へる爾庭を秋

野二徒く利て御もの可た利の

ついて爾多てまつ利个る

斜とはあれて人者不利二しやと那連  
とや二はもま可支も秋のゝらなる

遍照

古今倭歌集 卷第五

秋下

惟貞親王家歌合爾

文屋康秀

不<sup>か</sup>久<sup>か</sup>可<sup>か</sup>らにのへ農<sup>の</sup>久<sup>く</sup>さ支<sup>の</sup>志<sup>し</sup>本<sup>は</sup>るれ  
者<sup>は</sup>むへやま可<sup>か</sup>世<sup>を</sup>あらしと云<sup>え</sup>藍<sup>い</sup>  
久<sup>く</sup>さも木<sup>も</sup>毛<sup>も</sup>色<sup>か</sup>可<sup>か</sup>は禮<sup>れ</sup>とも海<sup>うみ</sup>童<sup>どう</sup>のな  
みの花<sup>はな</sup>二<sup>に</sup>そ秋<sup>あき</sup>な可<sup>か</sup>利<sup>り</sup>介<sup>け</sup>る

紀淑望

毛<sup>も</sup>美<sup>み</sup>地<sup>ち</sup>世<sup>せ</sup>ぬと支<sup>の</sup>はの山<sup>やま</sup>者<sup>は</sup>布<sup>ふ</sup>久<sup>く</sup>可<sup>か</sup>世<sup>せ</sup>能<sup>の</sup>音<sup>ね</sup>  
爾<sup>に</sup>や秋<sup>あき</sup>を聞<sup>き</sup>わ多<sup>た</sup>る藍<sup>い</sup>  
題<sup>だい</sup>不<sup>ふ</sup>知<sup>ち</sup> 讀<sup>よ</sup>人<sup>ひと</sup>し<sup>ら</sup>須<sup>す</sup>



き利<sup>た</sup>多<sup>た</sup>ちて可<sup>か</sup>利<sup>り</sup>所<sup>こ</sup>なく那<sup>な</sup>る片<sup>かた</sup>岡<sup>おか</sup>の朝<sup>あさ</sup>  
のほらは黄<sup>わう</sup>葉<sup>えつ</sup>しぬ嵐<sup>あらし</sup>  
我<sup>わが</sup>門<sup>かど</sup>のわさ田<sup>た</sup>のい年<sup>ねん</sup>も苺<sup>いちご</sup>なく爾<sup>に</sup>ま  
多<sup>た</sup>支<sup>し</sup>うつろふ神<sup>かみ</sup>なひのも利<sup>り</sup>

貞<sup>まこと</sup>觀<sup>かん</sup>御<sup>ご</sup>時<sup>とき</sup>綾<sup>あや</sup>綺<sup>き</sup>殿<sup>どの</sup>の御<sup>ご</sup>前<sup>まへ</sup>爾<sup>に</sup>梅<sup>うめ</sup>

樹<sup>き</sup>あ利<sup>り</sup>ける可<sup>か</sup>西<sup>せい</sup>の方<sup>かた</sup>爾<sup>に</sup>さ世<sup>よ</sup>り个<sup>こ</sup>

類<sup>るい</sup>枝<sup>えだ</sup>の紅<sup>こう</sup>葉<sup>えつ</sup>八<sup>はち</sup>しめた利<sup>り</sup>けるを

うへ爾<sup>に</sup>候<sup>こう</sup>男<sup>おとこ</sup>共<sup>ども</sup>歌<sup>うた</sup>讀<sup>よみ</sup>次<sup>つぎ</sup>爾<sup>に</sup>よめる

藤<sup>ふじ</sup>原<sup>の</sup>勝<sup>かつ</sup>臣<sup>しん</sup>

於<sup>お</sup>なしえをわ支<sup>し</sup>て木<sup>き</sup>能<sup>の</sup>葉<sup>の</sup>の色<sup>いろ</sup>付<sup>つ</sup>八<sup>はち</sup>

西<sup>せい</sup>こそ惡<sup>あく</sup>支<sup>し</sup>能<sup>の</sup>始<sup>はじ</sup>な利<sup>り</sup>个<sup>こ</sup>れ

石<sup>いし</sup>山<sup>さん</sup>爾<sup>に</sup>まうてける時<sup>とき</sup>おとは山<sup>さん</sup>乃<sup>の</sup>

毛<sup>け</sup>みちをみて 貫<sup>つら</sup>之<sup>の</sup>

秋<sup>あき</sup>風<sup>かぜ</sup>のふ支<sup>し</sup>爾<sup>に</sup>し日<sup>ひ</sup>より於<sup>お</sup>とはや万<sup>まん</sup>  
峯<sup>かみ</sup>の木<sup>き</sup>須<sup>す</sup>る裳<sup>も</sup>以<sup>も</sup>ろつ支<sup>し</sup>耳<sup>みみ</sup>个<sup>こ</sup>利<sup>り</sup>

惟<sup>ただ</sup>貞<sup>まこと</sup>能<sup>の</sup>みこ能<sup>の</sup>家<sup>の</sup>の歌<sup>うた</sup>合<sup>あ</sup>爾<sup>に</sup>

藤<sup>ふじ</sup>原<sup>の</sup>敏<sup>みん</sup>行<sup>ぎやう</sup>

新<sup>あらた</sup>らつゆの色<sup>いろ</sup>はひとつを以<sup>も</sup>可<sup>か</sup>にして

惡<sup>あく</sup>き能<sup>の</sup>木<sup>の</sup>能<sup>の</sup>葉<sup>の</sup>を千<sup>ち</sup>々<sup>ち</sup>爾<sup>に</sup>染<sup>せん</sup>藍<sup>らん</sup>

忠<sup>ちゆう</sup> 岑<sup>さん</sup>

あ支<sup>し</sup>の夜<sup>よ</sup>者<sup>もの</sup>露<sup>つゆ</sup>をは徒<sup>た</sup>ゆと於<sup>お</sup>支<sup>し</sup>な

から閑<sup>かん</sup>利<sup>り</sup>のなみ多<sup>た</sup>やのへを染<sup>せん</sup>藍<sup>らん</sup>

題<sup>だい</sup>不<sup>ふ</sup>知<sup>ち</sup> 讀<sup>よみ</sup>人<sup>ひと</sup>しら須<sup>す</sup>

惡<sup>あく</sup>支<sup>し</sup>の露<sup>つゆ</sup>色<sup>いろ</sup>こと／＼爾<sup>に</sup>お个<sup>こ</sup>はこそ山<sup>さん</sup>能<sup>の</sup>

古<sup>ふる</sup>の者<sup>もの</sup>な千<sup>ち</sup>種<sup>しゆ</sup>なるらめ

毛<sup>け</sup>る山<sup>さん</sup>爾<sup>に</sup>て 貫<sup>つら</sup>之<sup>の</sup>

志らつゆも志くれ毛以多く毛る山者下  
葉のこら須色付二個利

秋之歌とて讀る 在原元方

雨不れと露毛漏しを笠と利の山は如何  
てもみち染藍

神の社の阿多利を罷けるにい可  
き能も美ち乎みて 木貫之  
千盤破か三能意可支爾者ふ久須毛  
惡支に者阿へ須色付爾け利

惟貞の親王の家の歌合爾讀る

壬生忠岑

あめ不れ者閑さと利山能もみちは、  
ゆ支可ふ人のこゝろとみる

寛平御時の后宮の歌合に讀る

讀人不知

ちらねと茂金てそ惜き毛美ちは、  
今者可支り乃以ろとみつれ者

やまとの國へ罷个る爾さ本山爾

霧の多ち个る乎 紀 友 則

た可堂めの二しきなれ者可惡支、利の  
さを能山へを多ち可久須らん

惟貞親王の家の歌あはせ爾

よみ悲としら須

秋霧は今朝者な多ちそ佐保山  
能母、其もみちよ曾にて毛三無

秋歌とてよ免る

坂上是則  
佐保山のはゝそ能毛みちう須个れと  
悪支の不可久もな利爾希る可な

人の家能前栽菊爾結付てうゑ个る  
在原業平

う衛しうゑは悪支なき時やさ可佐  
良無花こそ千らめ根さへ可れめや

惟貞親王の家歌合爾

木友則

露な可良折て頭挿菊花老世ぬ秋

能悲散し可流へ具

飛さ可多能具裳能うへ爾てみる支くは

阿末つ本しとそあや万多れ个る

此歌者万堂うへゆるされ散利  
个る時めしあ个られてつ可う万

徒るとなん

於なし御時爾后宮の菊合爾

千里

殖時花待遠爾在し菊移呂布色

爾逢とやみ志

於なし御時のきくあはせ爾洲濱二

吹上能者万を徒く利て菊花

をうゑ多利个る爾そへ多利ける

菅原朝臣

悪支可せの不支あ个爾たてる志ら支久は

者那可あらぬ可なみのよす累可

仙宮爾菊をわがて人の意利た  
利介る乎惠爾か希利ける乎みて

素性法師

ぬれて本須山ちのきく能都ゆの万爾いつ  
家千年を我者經へ二にけむ  
支く能者那のもとにてひとを万  
ち多る可たを

木友則

花見管人待時者白妙乃袖可との三そ  
悪やま堂れ介類

大澤の池の可た爾き久越うゑ  
多利ける乎  
悲ともと、於もひし花を於本佐わの池

の曾こ爾は誰可うゑ介無

世中八可な支事思介るこ呂き久能花  
をみて つら遊支

悪きの支く耳奉不可支利八かさしてむ  
者那よ利佐支としらぬわ可身を

新ら支九の花をみ氏

躬恒

心あてにをらはやはをらん初霜のお支  
まとはせる志ら支久能花

惟貞親王の家歌あはせ爾

讀人しら須

以ろ可はる秋の支九を一年爾二般爾  
奉ふ花とこそ見禮

仁和寺の菊めし个るにそへて  
多て末つ利个る 平定文  
秋を於きて時こそ在个れき久能者那う  
都ろふ可らに以呂の方される  
悲との毛とにき久能者那をうる  
多利个る乎みて 貫之  
散支楚免しやとの可八れ者支く能者那  
以ろさへ爾こ會有つろひ二希れ  
題不知 讀人しら須  
斜本山能者ゝそ能毛みちゝ利ぬへ三  
夜るさへみよとてら須月可个  
みやつ可へひさしうつ可う徒らて  
山さとにこも利侍利个る時

藤原關雄  
於く山のい者可支もみちゝ利ぬへ三てる  
日の飛可利みるよしなくて  
題不知 奈良帝御製  
た徒多可はもみち見たれてな可るめ利  
和多らは二し支な可や多えな無  
讀人不知  
多つた可はもみち八な可る可み那ひのみむろの  
邪末爾新具れ不頼らし  
此歌二首或人のい者久ならの帝御歌  
藤原關雄  
こひしくはみて裳しのは無毛みちは  
越不支那ちらしそ山おろしの風

あ支可せ爾阿へ須ち利ぬるもみちはの  
ゆ久ゑさ多めぬわれそ可那し支

題不知 読人しら須

秋八來ぬ黄葉ハやとに不利 支ぬみちふ

美わ介てとふひとはなし

布三わ介て佐らにやとはむ毛みちはの

不利可九してしやとゝみな可ら

あ支の徒支山へ散や可にてら世るはちる

もみちはの可須をみよと可

布久可世能ちくさの意爾爾美えつるは

悪支のこ能者能ちれ者那利介利

題しら須

志もの多て徒ゆのぬ支こ曾毛ろ可らし

や末能二しき能於禮はか都ちる

雲林院の木能可介爾たゝす三て

遍照

わひ人のわ支てたちよる古のものは多

農無可介那久もみちゝ利介利

二條後の東宮能みや春む所ご申志

時屏風のゑ爾龍田河爾紅葉み

多れたる形可介る乎みて

素性法師

紅葉はのな可れてとまるみ那とに者

くれなる不可支な三やたつらん

惟貞親王の家の歌合爾

業平

ちはやふる神よもしら須多つ多可は可らく  
禮なる爾みつ久ゝるとは

同人の家能歌合爾

敏行朝臣

我き徒る可多もしられ春久ら布山  
木々のもみちのちると万可ふに

忠岑

甘南備のみむる能山を秋行者錦  
裁着心地こそす禮

北山爾黄葉をらんとて罷て

貫之

み流ひともなくてち利ぬる於く山のも  
三ちは夜るの爾し支な利个利

秋歌とてよ免る

兼覽王

たつ多ひめ堂む久る閑みのあ禮者こそ  
惡支のこ能はのぬさとちるらめ

小野といふところ爾てすみ侍利个る時

貫之

あ支山能もみちをぬさとたむくれ者  
須むわれさへ爾たひ心地する

可み那悲能山をす支てたつ多可

はをわ多利个る爾もみちのな可れ  
个れ者

清原深養父

かむなひの山乎す支行秋なれ者多  
徒た可八こそぬさ八堂む久る

ちはやふる神よもしら須多つ多可は可らく  
禮なる爾みつ久ゝるとは

同人の家能歌合爾

敏行朝臣

我き徒る可多もしられ春久ら布山  
木々のもみちのちると万可ふに

忠岑

甘南備のみむる能山を秋行者錦  
裁着心地こそす禮

北山爾黄葉をらんとて罷て

貫之

み流ひともなくてち利ぬる於く山のも  
三ちは夜るの爾し支な利个利

寛平御時中宮歌合

藤原興風

志らな見爾惡支のこ能は農う可へる乎  
あま乃な可せる不年可と所みる

龍田河の邊爾て坂上是則

毛美知はのな可れ散利世は多つた可八  
みつ能あ支乎は多れ可しら末し

志賀能山こえにて

春道烈樹

邪末可は爾加世能可け多るし可ら美は  
な可禮无阿へぬ毛みちな利け利

池邊爾紅葉能ちる乎

躬恒

可世不个婆お川類もみちは美都き與  
美ちらぬ可个散へそこにみえ川

亭子院御屏風のゑ爾河わ多らん

とするひと无美知、流木の毛とに馬  
乎とゝめ天たて類を讀世給へる

躬恒

多知わ多利美てを和多らん紅葉は  
阿め登不類と茂水はまさらし

古れ散堂能親王の家能歌合爾

忠岑

山多もる秋の可利は爾おくつゆはいな  
於本せと利のなみ堂な利个利  
多意しら須  
よみひとしら須



奉爾はしいてぬやま多たをもると可からこ  
ろもいな八はのつゆ爾にぬれぬよそな支か  
題しら須す 讀人しら須す  
閑連類かんれんるい多爾たに於お不ふる悲徒ひつちのは爾にいて  
ぬ者もの世乎よ以もまさらにあ支か八はてぬと可か  
遍照へんしょう可かまつ多た個こと利りに北山爾きたやまにま可か  
れり希まれるによめ流なが

素性法師

もみちは、楚そてにこ支かいれて毛けて、  
なんあ支かはか支か利りとみむ人のため  
寛平御時古歌たてまつれと仰  
事あ利り个こるに多た都つ太た可かはも  
みちはな可かるといふわ可かをとも

讀氏よみ其情をよめる

興風

み山やまよ利り於おちくる水のいろみてそ秋  
者可か支か利りと於おもひし利りぬる  
惡支あくしのはつる心をたつ多た河かを於おも  
飛とや利りて 貫つら之の  
毎年まいねん二にもみちはな可かるたつ多た可かはみ那  
登のぼや秋あきの東あづま万ま利りなる覽らん  
九月くがつつこも利りに大井爾おおいに爾にて

貫之

ゆふつ久ひさよをくらの山爾やまになくし可かのこゑ  
こゑ能ようち二ふたやあ支かの久ひさるらん  
同おなつこも利りの日ひ 躬まが 恒とこ

301  
10

みちし羅はたつ年も行むもみ知  
葉をぬさとたむ個てあ支はい二個利

昭和十一年九月廿一日印刷 定價金貳圓參拾錢  
 昭和十一年九月廿五日發行

筋切 (四)

編輯者 武田基一  
 代印者 武田基一  
 發行所 東京市下谷區中根岸町七二  
 印刷所 東京市下谷區中根岸町七二  
 印刷人 武田基一  
 印刷入 黒川秀藏

發行所 東京市下谷區中根岸町七二  
 武田墨彩堂  
 電話 四三三七番  
 振替東京六〇五四八番

301  
10

昭和十一年九月廿一日印刷 定價金貳圓參拾錢  
昭和十一年九月廿五日發行  
發行所 東京市下谷區中野町七二  
武田圖書社  
電話 三三七  
電報掛號 六〇五八八

小冊全集第一卷  
第四冊  
編輯者 武田圖書社  
代印者 武田圖書社  
發行人 武田圖書社  
印刷人 武田圖書社  
印刷所 武田圖書社

終

